あなたは神に愛されている　　**ルカ 15:1-7**

皆さんは、忘れ物や失くし物をよくされますか。私などしょっちゅうです。出かけてから、忘れ物をしたことに気づいて家に引き返すこともあります。最近は拍車がかかって、忘れたことを忘れるということも起こっています。失くしものを捜している間にちょっと一息入れると何を捜していたのか分からなくなってしまうのです。また忘れ物を取りに帰ったのに携帯に電話が入って話し終えるとここに何しに来たんだろうと思ってしまうこともあります。そんな状態ですから忘れ物や失くし物が見つかった時は非常に嬉しくなります。

今日のルカの福音書には、失くしたものが見つかった喜びが、たとえ話の形で書かれています。迷子になった羊を見つけ、そのことを羊飼いを始め、みな大層喜んだという羊飼いの話です。このたとえでは、「失われたもの」とは「羊」です。「羊」は私たち人間の姿を表しています。聖書は、羊が迷いやすいもので、人間も同じようだと言っています。詩篇 119:176 にこんな祈りがあります。「私は滅びる羊のようにさまよっています。どうかこのしもべを捜してください。」イザヤ 53:6 には「私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。」とあります。ゼカリヤ 10:2 にも「夢見る者は意味のないことを語り、空しい慰めを与える。それゆえ、人々は羊のようにさまよい、羊飼いがいないので苦しむ。」とあります。まことの神から離れ、偶像や夢に頼っている人々に譬えられています。

羊は家畜の中でも、賢くない動物です。遠くのものがよく見えません。視野が狭くて近眼なのです。においもよくかげません。ですから、自分で牧草や水を見つけることができません。足も速くありませんし、自分を守る牙や爪も持っていません。羊は、羊飼いなしには、自分を養うことができないばかりか、いつも命の危険にさらされているのです。同じように、私たち人間も羊飼いである神から離れていることは、とても危険なことなのです。しかし、多くの人はそのことに気付かないまま、相変わらず、神に背を向けて歩き続けています。いろいろ考えたり悩んだりしますが基本的には自分の思うまま、気の向くまま生きています。あるベテランの人生相談の解答者の方がこんなことを言っていました。「来た相談に答えるのは意外と簡単なことです。相談する人のやりたいことを聞いてそれにそった答えを出すと良いだけです。相談する人は自分の持っている考えをより支持してほしいというのが本音だからです。ですから反対のことや違う意見を出すと殆どその通りにはしません。」と。そうかもしれませんね。

人は、神の目から見れば「失われた者」なのですが、「失われた人」とは、同時に「神を見失っている人」でもあるということです。人は神が創造されたすべてのものが、神がおられることを証言しているのに、それを聞こうとしません。神がおられることの証拠があっても、それを見ようともしません。そして、人は、神を見失うとき、自分を見失います。自分が何者なのか、どこから来て、どこへ行くのか、なぜ、ここに生きているのか、何のために生きるのかを見失っているのです。見ているようで見ていない、分かっているようで何も分かっていない者と言えるのではないでしょうか。ある人は言うでしょう。「別に神を信じなくても、毎日楽しく暮らしていれば、それでいいではないか。」しかし、順調な日々が生涯続く保証はどこにもありません。いつ重い病気に見舞われるか、経済的に破綻するか分かりません。家庭の中に問題が起こって家族がばらばらになることもあります。神の守りがなければ、お金や、財産などといった目に見えるものに依存した「幸せ」はすぐに消えてしまいます。信仰がなければ、人は、思い煩いや不平不満に、簡単に陥ってしまいます。思い煩いが重なると不安になり、不安が重なると恐怖になります。そうしたことから心や身体の病気になるのです。落胆を繰り返すと失望になり、失望を繰り返すと絶望になって、生きる喜びを見失ってしまいます。

たとえ、平穏で順調な人生であったとしても、神から離れたままで、本当に意義のある日々を送ることはできません。人間だけが味わうことのできる魂の満足や喜びは得られません。また、困難や苦しみの中でも押しつぶされない力を得ることもできません。私たちは、羊と同じように、自分の力では「緑の牧場」や「いこいの水」にたどり着くことはできないのです。そこに導いてくださるのは、羊飼いであるイエ

ス・キリストです。「主は私の羊飼い。私は乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させいこいのみぎわに伴われます。」（詩篇 23:1-2）とある通りです。神を見失い、自分を見失っている人、つまり「失われた人」は、結局、満ち足りた人生、豊かな命をも見失っているのです。

このたとえで失われたものを捜し求めた人、つまり、羊飼いとは、イエス・キリストのことです。このたとえ話で、羊飼いが、百匹の羊のうち一匹がいないことに気づいたのは、恐らく羊を囲いに入れるときだったでしょう。私は、これを教会学校で子供たちに話すとき、ずっとこう言っていました。「羊飼いが羊を百匹持っていました。夕方になって、羊を羊たちのお家に入れました。『一匹、二匹、三匹、…九十八匹、九十九匹。あれ、一匹足りないぞ。…』」と言う風に。しかし、それは間違いだということに気付きました。というのも、当時、羊飼いは、羊には、一匹一匹に名前をつけて、名前で呼んでいたからです。つまり「シロ、ブチ、チョロ、クロ（ちょっと犬みたいですが）、…タロー、ハナコ、チビ、さあ、お家にお入り！あれ、チビがいないぞ。…」それが実際に近いものだったのです。同じようにイエス・キリストは、私たちを名前で呼んでくださいます。マイナンバー制度とか、時代は一人一人が番号で処理される時代になっています。それなりのメリットがあると思いますが番号の主体である個人の人格と尊厳が軽視されてゆくことは決してあってはならないと思います。世界に今八十億人ほどがいるとされていますが、神は人々を数で数えたり、番号で呼んだりはなさいません。主は、私たち一人ひとりを「八十億分の一」としてではなく、かけがえのない人格として扱い、名前で呼んでくださっています。たとえ、自分自身は「百匹の中の一匹」のような者、「八十億分の一」のような存在でしかないと思っていたとしても、主は、その人の名前を呼んで、捜し求めてくださるのです。

羊飼いが羊を囲いに入れるのはたいてい夕暮れです。ですから夕暮れになってから野山に出ていくのは、羊飼いにとっても危険なことでした。しかし、羊飼いは「他に九十九匹いるのだから、一匹くらい失ってもしかたない。捜しに行って、こっちまで災難にあったら大変だ」などとは考えませんでした。危険を冒してでも、いなくなった一匹を熱心に捜し求めました。迷った羊は昼間は目の前に出てくる珍しいものや風景に感動したり、興奮して跳んだり跳ねたりしていたことでしょう。しかし夕方になって段々とあたりは暗くなってくる。ふっと気が付くと仲間の羊がいない。見たこともないところに来ている。鳴いても何も応答が無い。それに加えてもしけがなんかしていたらそれこそ恐怖で立ちすくむしかないと想像します。

きょうの箇所から生まれた讃美歌に「九十九匹の羊は」（新聖歌 217）という歌があります。こう、歌われています。

九十九匹の羊は檻(おり)にあれども
戻らざりし一匹はいずこに行きし
飼い主より離れて奥山に迷えり、奥山に迷えり
　「九十九匹もあるなり主よよからずや」
　　主は答えぬ「迷いしものもわがもの
　　いかに深き山をも分け行きて見出さん、分け行きて見出さん」

4 節目には、こうあります。

「主よ山道をたどる血潮は何ぞ」
「そは一匹の迷いし者のためなり」
「御手の傷は何ゆえ」「いばらにて裂かれぬ、いばらにて裂かれぬ」

失われた羊のために、羊飼いが傷つき、血を流したことが歌われていますが、イエスは実際に、鞭打たれ、頭に茨の冠を被せられ、十字架に両手両足を釘付けにされ、血を流されました。それほどまでに、失われた者を捜し求めてくださるお方は、誰か他にいるでしょうか。イエス・キリストの他、誰もありません。

このたとえ話は「喜び」で終わっています。羊飼いが迷子の羊を見つけ出し、連れ戻すためにどんなに大きな犠牲を払ったかその苦労話ではありません。5 節と 6 節にこうあります。「見つけたら、喜んで羊を肩に担ぎ、家に戻って、友だちや近所の人たちを呼び集め、『一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから』と言うでしょう。」この羊飼いは、失われたものを取り戻した喜びを、自分ひとりだけにとどめておくことはできませんでした。失われたものを見つけ出した喜びは、それほどに大きいのです。

それからイエスは、「あなたがたに言います」と、厳かな前置きをして、「それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。」（7 節）と言いました。ここで、「あなたがた」と言われているのは、パリサイ人や律法学者たちのことです。パリサイ人や律法学者たちは、自分たちは律法を守って正しい生活をしている。だから神は私たちのことを特に愛してくださっていると思い込んでいました。彼らは自分の罪を認め、それを悔い改めることによって、罪赦され、神に立ち返ることができる、つまり救われるという恵みを体験できずにいたのです。「そんな虫の良い話があるはずはない、あってはならない」とさえ思っていたのです。ですから素直に悔い改め、神に立ち返った人たちが、イエスを自分の家に招き、食事を共にしてそれを喜びあっているのを見て、怒り非難したのです。「私がどれだけ我慢して苦労してきたと思っているのだ。」と。このパリサイ人や律法学者の非難は、イエスに従っていた人たちに対してだけではありませんでした。「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」（2 節）と言って、イエスをも非難したのです。

さてこのたとえ話には、喜びは喜びでも「見つけ出された喜び」よりも、神が失われた人々を「見出した喜び」が大きく描かれています。このたとえで最も強調されているのは、羊を見つけ出した羊飼いの喜びなのです。神に立ち返った者が神を喜ぶことにまさって、主イエスは、神に立ち返った者を喜んでくださっているのです。イエスは、ご自分を、失われた一匹を見つけ出した羊飼いになぞらえ、どんなにか羊飼いのもとに戻ることのできた羊である私たちを喜んでくださっているかを、伝えようとされているのです。なぜそこまで喜んでくださるのでしょうか？　聖書では滅びるとは永遠に神がおられない世界を生きることを言いますが神がおられない中を生きることがどれほど悲惨なことであるか分かっているからです。そこには平安が全くない不安と恐怖に満ちたところ、正義が無くて不正に満ちたところ、喜びがなく悲しみと痛みに満ちたところ、つまり人間の嫌なところばかり、毎日毎日見続けるということです。だから羊飼いに見いだされたこと、神様のもとに立ち返ったことが大きな喜びとなるのです。キリスト教の基本は神が私をキリストのいのちをかけるほど愛し、私の存在を喜んでいてくださるということです。信じられないぐらい大きく神に愛されていることを信じましょう！

ほんとうは、人間の側から、主を呼び求め、主を捜し求めるべきなのですが、実際は、いつでも、主のほうから、人間を呼び求め、捜し求めてくださっています。神を知らなくても私たちが絶対絶命の状況に追いやられた時に私たちは誰でも「神様。助けてください。赦してください」と叫びます。私たちが主の名を呼び求め、私たちに主を求める思いが与えられているのは、それは主が私たちを捜し求めておられるからなのです。「そんなことは当然だ。」「誰でも困った時は神頼みだ。」で片づけないでいただきたいと思います。S.O.S のようにいざと言う時に出すことばとして神は与えて下さっているのです。神様は捜し求め、ここに連絡するようにとそのことばを用意してくださっているのです。使徒 2:21 に「主の御名を呼び求める者はみな救われる」とあります。私たちも主イエスを呼び求め続けましょう。必ず、主に見出されます。そして、私たちの「見つけ出された喜び」と、神の「見出した喜び」とが出会います。そのとき、私たちは、大きな天の喜びに満たされるのです。その時、「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選んだのです」ヨハネ 15:16 このみことばの意味を理解するのです。